

カリフォルニア的想像力

Gravity's Rainbow における空間的転回と 1970 年代

榎本 悠希

トマス・ピンチョンの代表作 *Gravity's Rainbow* (1973) は、この第二次世界大戦のヨーロッパを丹念に描きながら、それは表層に過ぎず、実際にはその背後でうごめくグローバル資本主義の結託をアイロニカルに描いてみせた「パラノイア的想像力」の物語である。けれども、本発表の問題意識は、その百科事典小説のラストが、1970 年西海岸カリフォルニア州はロサンゼルスと言う時空間においてなぜ幕を閉じなければならなかったのか、という点にある。本発表は、1966 年 7 月に掲載されたピンチョン唯一のルポルタージュ作品“A Journey into the Mind of Watts”を補助線にしなが、*「第二次世界大戦下のヨーロッパ大陸を流浪する物語」*が、*「1970 年代の西海岸ロサンゼルス」*という時空間で終わることのその意義を考察する。

1. “A Journey into the Mind of Watts”から *Gravity's Rainbow* への旅路——1966 年から 73 年代へ

“A Journey into the Mind of Watts”は、1965 年の「ワッツ動乱」という暴動が起こった後のロサンゼルス・ワッツへのエクスカージョンを経て書かれた、いわば、彼の現実の旅路を踏まえた上で書かれたテキストだ。このルポにおいてピンチョンは、なぜこの暴動が生じたのか、いわば「ワッツという街が本当に感じたこと」 (“What the Watts truly feel”) をキーワードに、白いアメリカの「前哨」 (“outpost”) としての黒人共同体、ワッツの深層へと迫る。いわば、ピンチョンのワッツへの旅路とは、そうした周縁に位置する人々への共感を保ちながら、白人によって支配される空間を批判する試みなのである。そして、暴動に訴えざるを得ない周縁化された人々の意識と、それを支配する白人西洋文明のヘゲモニーというテーマは、“A Journey into the Mind of Watts”から *Gravity's Rainbow* へと継承される。いわば、“A Journey into the Mind of Watts”は、*Gravity's Rainbow* へと至る上での彼の準備期間のテキストとしても解釈可能なのである。そして、この問題系は、「ゾーン」 (Zone) において特に顕著に観察できる。

2. the Zone Herero の革命——“Ghetto”から“Zone”へ

Gravity's Rainbow においてピンチョンは、第二次世界大戦に敗北し「国家なき状態」 (statelessness) と化している旧ドイツの「ゾーン」を通じて、あらゆるヨーロッパの異なる国々の人々が共存する、移動を基調とする混沌としたフロンティアレス (“frontierless”) な共同体を描く (549)。こうした共同体はまさに人種や民族などマイノリティのラディカルな問題を内包している。例えば、南アフリカのヘレロ族の末裔「ゾーンのヘレロ族」 (the Zone Herero) である。彼らは、1904 年のドイツによる植民地化によって虐殺され、生き残ったものは兵士として訓練されるためにドイツへと送還され (287-88)、第二次世界大戦下の時期において、この流れをひく「ゾーンのヘレロ族」は、西洋諸国から自分たちを守るための防衛策として、“Rocket 00000”を製造しようとする。この民族のリーダー、エンツィアンは、まるでカルト教団の教祖のように、そのロケットを崇拜対象として創造することで、ゾーン・ヘレロ族とオリジナルのアフリカ・ヘレロ族とを統合しようとする。しかし一方で、こうしたエンツィアンのロケットによって繋がる共同体は、Joanna Freer も指摘するように、「人種的な自殺願望」 (racial suicide) を孕んでいる。エンツィアンは作品を通して好意的に描かれているキャラクターではあるものの、最終的には民族を死へと導いてしまう可能性を有しているからだ。ロケットによって結びつくエンツィアンの“Zone Herero”は、その V-2 ロケットという名の暴力性で以って、自分たちの民族の結束を再び結集させる。このテクノロジーの武力を通じたエンツィアンの訴えもまた、それによって、“the Zone Herero”

とオリジナルの“African Herero”とを結び合わせることで、“A Journey into the Mind of Watts”におけるピンチョンの言葉で言えば、「暴力が本当の自分たちのあり方を伝えようとする試みとなりうる」“violence may be an attempt to communicate, or to be who you really are”のである (82)。

3. 1945年と1970年の二重性の構造

交互に切り替わる映画のカットのよう、*Gravity's Rainbow* のラストにおいては、1945年に点火され発射され上昇するロケットと、1970年のロサンゼルスに向かって落ちるロケットとが、繰り返し描かれる。この後者のロサンゼルス・パートにおいて注目すべきは、やはり「ワッツ」に対する言及があるという点だ。リチャード・ニクソンのカリカチュアであるズラップは、ハーバー・フリーウェイ付近のワッツにおける“ghetto-suicidal”（ゲットーの自殺性）を発見する (755)。そして、ズラップの話には、“consciousness of kind”という感覚を喚起させる、と語り手は言う (756)。これは、Franklin H. Giddings によって、Adam Smith の“Sympathy”の概念を経由して考案された、社会の基盤を同類性 (homogeneous) によって見出すという概念だ。その同質性に基づく一体感に対して、語り手は「身の毛がよだつのを抑えられない」“you cannot repress a certain shudder of distance”と言う。対して“A Journey into the Mind of Watts”においては、人種間の意思疎通は、“A Watts kid knows more of what goes on inside white heads than possibly whites do themselves; knows how often the little man has looked at him and thought” (82) とあるように、同質性の強調ではない別の形が取られていた。それは、ズラップの“consciousness of kind”における“reflexive”な同質性への“sympathy”の衝動ではなく、他者の視線を介した“empathy”とでも言うべきつながりのあり方の端緒となるものだろう。¹

Gravity's Rainbow は、ロケットが落ちるその瞬間に幕切れとなる。しかし、最後の局面において、映画を観る観客たちに対して、物語の語り手は呼びかける。その呼びかけは、その恐怖に対して、映画館の暗闇の中にあつて、自らを慰めるか、あるいは隣の人間に触れ合つて恐怖を紛らわすことを示唆している。しかし、それによって生じた緩やかな「連帯」はまた、ロケットの恐怖によって起こったものではあるだろう。この暗闇の中にあつて、観客たちにできるのは、ただただ偶然に居合わせた隣人との刹那の共感であり、そこにスロースロップの詩の音が、微かな弾みを携える。

Selected Bibliography

Clohesy, Anthony M. *The Politics of Empathy: Ethics, Solidarity, Recognition*. Routledge, 2013.

Freer, Joanna. *Thomas Pynchon and American Counterculture*. Cambridge UP, 2014.

Newton, Huey P. *Revolutionary Suicide*. Harcourt Brace Jovanoich, 1973.

Pynchon, Thomas. “A Journey into the Mind of Watts.” *New York Times Magazine* 12 Jun, 1966. pp.34-35, 78, 80-82, 84. ---. *Gravity's Rainbow*. 1973. Penguin, 2013.

Witzling, David. *Everybody's America: Thomas Pynchon, Race, and the Cultures of Postmodernism*. Routledge, 2008.

永野良博 『トマス・ピンチョン——帝国、戦争、システム、そして選びに与れぬ者の生』三修社、2019年。

¹ Anthony M. Clohesy は、*Politics of Empathy: Ethics, Solidarity, Recognition I* (2013)において、この“emphaty”と“sympathy”という概念について、“empathy”を19世紀にドイツ語から輸入した概念だとした上で、以下のような論じ分けをしている——：“One difference is that Sympathy(and compassion)are ways of relating to another human being that do not require a sense of what it is like to be in their situation. Empathy is a far richer concept because it enables us to feel into the life another person, even if this act of feeling into is always an act of misrecognition.” (223) ちなみに、David Witzling は、この“Watts Kids”の意識を William Edward Burghardt Du Bois の“double consciousness”との関連において論じている (166)。